

機関番号：13601
 研究種目：特定領域研究
 研究期間：2005 ～2010
 課題番号：17083017
 研究課題名（和文） 「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」調整班 B01:現地調査研究部門
 研究課題名（英文） Maritime Cross-cultural Exchange in East Asia and the Formation of Japanese Traditional Culture: B01 Coordinating Group of Field Research Section
 研究代表者
 早坂 俊廣 (HAYASAKA TOSHIHIRO)
 信州大学・人文学部・准教授
 研究者番号：10259963

研究成果の概要（和文）：特定領域内に三つ設置された研究部門のうち、現地調査研究部門は、歴史学・思想史・文学史・経済学・建築学・考古学などの多分野から、共通して「現地調査」の手法を用い、寧波あるいは浙江の特色、および中国と日本の文化的影響関係を明らかにすることを旨とした。その結果、領域越境的なシンポジウムを多く開催し、部門の研究雑誌をほぼ毎年刊行した。また、部門の会合も何度も主催し、各計画研究が有機的に連携することができるようになった。

研究成果の概要（英文）：Field Reserch Section, which was one of three sections constituted in this project, aimed clarifying the characteristics of Ningbo or Zhejiang and the cultural influence relation between China and Japan by common method for "field reserch" from the many fields such as historical science, history of thought, literature, economics, architecture and archeology, etc. As a result, we held a lot of symposiums crossed the area and published the research magazine of our section approximately every year. In addition, we hosted many meetings of our section on purpose to encourage cooperating organically in our section.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	4,000,000 円	0 円	4,000,000 円
2006 年度	2,700,000 円	0 円	2,700,000 円
2007 年度	4,200,000 円	0 円	4,200,000 円
2008 年度	6,200,000 円	0 円	6,200,000 円
2009 年度	5,600,000 円	0 円	5,600,000 円
総計	22,700,000 円	0 円	22,700,000 円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：寧波、浙江、現地調査

1. 研究開始当初の背景
 まず特定領域研究全体に関して言えば、5年

間の準備期間を経て開始された。もとは宋代史研究会の研究報告集第6集「宋代社会のネ

ットワーク」および第7集「宋代人の認識—相互性と日常空間」（いずれも汲古書院刊）の編集作業を通じて、参加者の間で狭義の宋代史研究の枠組みを超え、また海外の研究者との密接な連絡・協力を通じて斯界の発展に務めることの必要性が認識された。そのような認識に従い、各種のシンポジウムの開催、民間財団の助成金を利用した国際学会への参加、様々な刊行部の出版などが続けられた後、寧波を焦点とする大規模な共同研究計画が立案され、2003年秋にはそのための企画調査として科学研究費補助金基盤研究(C)(1)が採択された。このような入念な準備の甲斐あって、本特定領域研究が採択され、領域越境的な共同研究が開始された。

本研究部門は、この特定領域研究に設置された三つの研究部門の一つであり、様々な研究分野の計画研究が「現地調査」という方法論のもとに結集した点に特色がある。各研究部門には、個々の計画研究が単発的な研究にとどまることがないよう、それぞれ「調整班」が置かれた。

2. 研究の目的

本計画研究は、以上のような任務を背負い、個々の計画研究と特定領域全体とを架橋・調整し、なおかつ「現地調査」という手法の有効性について模索を続けた。歴史学・思想史・文学史・経済学・建築学・考古学などの多分野から、共通して「現地調査」の手法を用い、寧波あるいは浙江の特色、および中国と日本の文化的影響関係を明らかにすることを目的とした。地域に数多く残されているさまざまな歴史的「遺産」を重視・活用し、また、そうした遺産を単にモノとして捉えるのではなく、それをとりまく地域社会の「エコシステム」の中に位置づけて長期的な環境・景観の変化のなかで人々の集成的な無意識の「心性」がどのようにあらわれて、交流の中でその心性がどのように変化したのかを追究することを目指した。

3. 研究の方法

ここまでの説明から明白なように、本計画研究は、まずは個々の計画研究の成果を集結し、それらの成果が有機的に連動し、寧波や浙江の地域的特色もしくは方法論としての「現地調査」の有効性の検証がより明確になるよう、文字通り「調整」を行うために設置された。具体的には、研究部門の研究会合や「現地調査」に関わるシンポジウム・ワークショップの開催、あるいは研究部門の学術雑誌の刊行などを通して研究を遂行するものである。

4. 研究成果

平成 17 (2005) 年度

10月に関西大学において、現地調査部門第

1回全体集会をおこない、今後の方針（特にGPSの活用）について話し合った。また、平成18年2月には東京大学駒場キャンパスにおいて、現地調査部門国際シンポジウム「寧波研究の課題と可能性—なぜ寧波が焦点になるのか—」を開催した。このシンポジウムでは、本部門および特定領域研究全体にとって鍵となる地域である「寧波」が、歴史的にどのような意味で焦点たり得るのかを、寧波を直接研究対象としている研究者の報告を通して検討し、今後に向けての課題をできるだけ多くのメンバーで共有することを最大の目的とした。シンポジウム当日は、世界の寧波研究者が集まり、寧波研究の現状を把握し、今後の課題について討論をおこなった。その結果、地中海・インド洋など他の海域世界とは異なる東シナ海海域の特色を考察していく必要性が確認された。

平成 18 (2006) 年度

この年度は、昨年度までの予備調査をもとに、各班による現地調査を本格化させた。同時に、現地調査研究部門の共通した目標として、「寧波 GIS プロジェクト」の計画を立ち上げることとし、ワーキンググループの結成、研究者の米国派遣を行った後、10月の現地調査部門全体会合（於 東京大学）では、現地調査の際に各班が共通して携帯型 GPS 装置により位置情報を得、プロジェクトを通して寧波の長期的な経済的・文化的空間の変遷を明らかにしていく目標が確認された。ただし、このプロジェクトについては、平成19年度～20年度にさらに具体的作業を進展させる予定であったが、中国における現地調査に対する法的・社会的制約が強化されたことや、このプロジェクトの中核をなす予定であったメンバーが続々と体調を崩したことが重なって、科研期間中に成果を取りまとめるころまで進めることができなかった。このことは、現地調査研究部門において最も悔やまれる点である。

現地調査研究部門全体のシンポジウムとしては、この年度には、現地調査が早くから進んでいた海港地域班・民俗信仰班を中心として、平成19年2月11日に国際シンポジウム「海をむすぶ祈り—東アジア海域交流と信仰—」を、長崎歴史文化博物館にて開催した。従来の東アジア海域史研究において、宗教や心性の問題は、研究の不十分な分野であったが、中国・フランスからも当該分野の専門家を報告者・コメンテーターとして招き、今後の海域宗教史研究に大きな一歩を踏み出す有意義な発表・討論がおこなわれた。なお、このシンポジウムの前日には、「東アジア海域史研究会」有志と合同で、現地調査研究部門の全体集会が開催された（於 長崎歴史文化博物館）。また、現地調査研究部門の雑誌『東アジア海域交流史 現地調査研究～地

域・環境・心性〜』第1号を刊行した。この雑誌は、これ以後も、現地調査研究部門が主催・共催した各種シンポジウムに関する特集や、部門メンバーからの投稿論文、現地調査の報告、研究史上価値ある海外の論文の翻訳、寧波現地調査と関わりの深い新刊の紹介などを掲載する充実した学術誌として、最終号である第4号まで毎年度刊行された。第1号は、前年度に開催した現地調査部門国際シンポジウム「寧波研究の課題と可能性—なぜ寧波が焦点になるのか—」で特集が組まれた。

平成19(2007)年度

平成19年9月29日に現地調査研究部門の全体集会を開催し(於 明治大学)、特定領域研究内における「重点項目」の設定等について報告がなされ、それを踏まえて、現地調査部門の今後の方向性について確認し合った。また、太田出・佐藤仁史(海港地域班)および加藤徹(演劇班)から現地調査の手法や成果に関する報告がなされた。さらに、各班の調査の進捗状況についても報告が行われ、今後の展開について討議を行った。また、11月9日には東方学会会員総会(於 日本教育会館)において、現地調査研究部門と文科省特別研究促進費「中世総合資料学」との共同で、シンポジウム「都市・墓・環境をめぐる歴史的空間—文理融合による日中比較—」を開催した。本シンポジウムでは、「空間」という共通の切り口から、文系・理系の研究者の協力によって日本と中国の比較をおこない、東アジア全体の視角から、日本・中国の共通性と相違性を考察する手がかりをつかむことを目的に三部分にわけて報告・討論をおこなった。なお、この年度には『東アジア海域交流史 現地調査研究〜地域・環境・心性〜』第2号を刊行した。前年度に開催した国際シンポジウム「海をむすぶ祈り—東アジア海域交流と信仰—」で特集を組んだほか、特定領域研究の有志による「ブローデル『地中海』を読む」研究合宿に関するフォーラムも掲載されている。さらには論文・翻訳・新刊紹介はもとより3篇の「現地調査報告」が載せられているなど、質量共に充実した雑誌となった。

平成20(2008)年度

この年度辺りから、特定領域研究の取り組みが「重点項目」を中心としたものにシフトしてきたため、部門メンバーも部門の枠を超えて共同研究を推進するようになってきた。平成20年7月27日に行われたワークショップ「焦点としての寧波・浙江——文化の多層性とその環境——」(於 東京大学)もそのような流れを受けた企画であり、主催は「重点項目(ロ):寧紹地区の環境・生態と人間社会の営み」であるが、報告者はすべて現地調査研究部門の関係者であった。このワークショップでは、現地調査を積極的におこ

なってきた部門メンバーが寧波ないし浙江の特色を踏まえた報告をおこない、この地域の社会文化的特色を、生態環境の視点もまじえて分析し、東アジア海域交流の焦点となっていた当該地域が歴史的にもっていた意味を考察した。また、12月21日には、総合地球環境学研究所と現地調査研究部門の共催で、「第1回中国環境問題ワークショップ/環境との対話」を行った(於 総合地球環境学研究所)。この中で、「環境との対話—東アジア海域世界と疾病—」というテーマのもと、岡元司(海港地域班)による「疫病・環境と東アジア海域史—科研寧波プロジェクトの紹介を兼ねて—」、山口聰(茶文化班)による「日本緑茶遺伝資源の起源地を求めて」といった発表が行われ、活発な討議が行われた。なお、この年度には『東アジア海域交流史 現地調査研究〜地域・環境・心性〜』第3号を刊行した。前年度に開催したシンポジウム「都市・墓・環境をめぐる歴史的空間—文理融合による日中比較—」、および出版文化班の企画によるシンポジウム「中国東南部の出版文化と日本の出版文化」(平成19年12月13日、於 国文学研究資料館会議室)・ワークショップ「中国出版文化の社会史」(同年12月15日、於 京都国立博物館会議室)で特集が組まれた。この雑誌は、第1号が162頁、第2号が212頁、第3号が248頁と、共同研究の進展と歩調を合わせるかのように内容を豊富にさせていった。

平成21(2009)年度

この年度も、「重点項目」を軸に各種の企画が進められた。「重点項目」が設置されて以来、前年度の部分で触れた「重点項目(ロ):寧紹地区の環境・生態と人間社会の営み」のみならず、「重点項目(イ):寧波を中心とした記録保存の社会文化史」に関して、現地調査研究部門調整班のメンバーが主たる取りまとめ役として共同研究を推進した。以下の各企画は、現地調査研究部門の主催したものではないが、部門メンバーが主導的な役割を果たしたものの一例である。「第54回東方学会議シンポジウム:近千年の中国における大地と社会の変貌——自然・景観・人口・交流などを中心として」(5月15日、於 日本教育会館)、「復旦大学国際シンポジウム:世界史の中の東アジア海域世界“1250-1350”、“1500-1600”、“1700-1800”」(6月18・19日、於 復旦大学)、「にんぷろワークショップ:中国東南地区の文献集散と天一閣」(7月23日、於 天一閣博物館)、「沖縄シンポジウム:東アジアの海域交流—琉球という視点から—」(12月12日、於 沖縄県立博物館講堂)。部門の雑誌についても、各班の行った現地調査に関する報告、11月21日に東京大学で行われた出版文化班第2回シンポジウム、上記の沖縄シンポジウ

ムで特集が組まれた。なお、現地調査研究部門代表として強力なリーダーシップを發揮してきた岡元司が、年度途中の10月3日に急逝した。そのため、残り期間の部門代表を、それまで副代表であった早坂俊廣が引継いだ。また、高津孝が部門副代表に就き、海港地域班から曾田三郎が部門調整班のメンバーに加わった。

平成22(2010)年度

この年度は、繰り越し申請が認められて研究活動を行った。繰り越し申請の理由は、上記の岡元司の急逝により、研究体制の立て直しが必要だったためである。まずは、そのための作業を行った。具体的に言えば、特定領域研究全体の企画として進めていた研究成果の刊行計画（一般向けに、東アジア海域交流・日本伝統文化の形成、およびそれらの結節点としての浙江・寧波に関する啓蒙的叢書を出版する。前記「重点項目」に各巻がほぼ対応する）の中で、岡が主導的に編集作業を行っていた巻（「重点項目(ロ)：寧紹地区の環境・生態と人間社会の営み」に対応）に関する編集会議を開催し、今後の方針の確認と岡氏の分担予定箇所を具体的にどう補填するかについての話し合いが行われた。また、早坂が主宰していた巻（「重点項目(イ)：寧波を中心とした記録保存の社会文化史」にほぼ対応。）についても、岡氏急逝への対応で遅れた分を取り戻すべく、編集会議を行った。さらには、刊行計画全体の調整を行うべく、他巻の担当者とも研究打ち合わせを行った。このような編集作業（研究活動）によって、刊行計画は格段に進展し、出版のめどがたつところまでこぎつけることができた。なお、上記の巻において総論・各論を執筆する必要上、早坂が物品購入を行い、それらの購入物・図書を利用して研究活動を行った。

これらの研究活動を通して、既に完了している特定領域研究全体の成果が、単に学術界のみならず、広く一般社会へと生かされる可能性が格段と広がった。研究期間終了後も他巻の担当者と連携し、数年内の出版刊行をめざしている

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計16件)

- ①二階堂善弘「日本妙見信仰與真武信仰」(中文),『浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査研究成果報告書(平成17年度～平成21年度文部科学省特定領域研究・東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成・寧波プロジェクト・現地調査部門B-11』pp.69-75, 2010, 査読無し
- ②二階堂善弘「日本渡来の華人の神々」,『ア

ジア遊学』第133号「道教美術の可能性」(勉誠出版) pp.197-203, 2010, 査読無し

③曾田三郎：熊希齡内閣的《政府大政方針宣言》与日本人的中国立憲国家論、「近代中国与日本」学術研究会論文集(陳廷湘主編), 2010, pp.20-42, 四川出版集團 巴蜀書社, 査読無し

④高津孝・橋口亘・松本信光・大木公彦「南西諸島現存礎石の産地についての一考察」人文科学論集第72号, pp.119-146, 2010, 査読無し

⑤高津孝「薩摩博物学と奄美」『鹿児島環境学Ⅱ』南方新社, pp.173-190, 2010, 査読無し

⑥大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘・内村公大「日本における薩摩塔・礎石の石材と中国寧波産石材の岩石学的特徴に関する一考察」, 鹿児島大学『理学部紀要』No.43, pp.1-15, 2010, 査読無し

⑦岡元司「宋代明州の史氏一族と東銭湖墓群」, 井手誠之輔編『寧波の美術と海域交流』, 中国書店, pp.83-99, 2009, 査読無し

⑧岡元司「疫病多発地帯としての南宋期両浙路・環境・医療・信仰と日宋交流」, 『東アジア海域交流史現地調査研究～地域・環境・心性～』3, pp.45-6, 2009, 査読有り

⑨二階堂善弘「中国の民間信仰における冥界観」, 『アジア遊学』第124号「東アジアの死者の行方と葬儀」(勉誠出版), pp.144-150, 2009, 査読無し

⑩加藤徹「明治維新を可能にした日本独自の漢文訓読文化」, 『中央公論』123-6, pp.198-208, 2008, 査読無し

⑪二階堂善弘「心に残る神と消えゆく信仰招宝七郎神を例として」『アジア遊学』第110号「アジアの心と身体」, pp.28-33, 2008, 査読無し

⑫二階堂善弘「海神・伽藍神としての招宝七郎大権修利」, 『白山中国学』13, pp.43-54, 2007, 査読有り

⑬岡元司「周防から明州へ-木材はなぜ運ばれたか」, 小島毅編『義経から一豊へ』勉誠出版, pp.30-36, 2006, 査読無し

⑭早坂俊廣(訳・解題)「狂禪と事功を一身に集めた万表(方祖猷著)」『東アジア海域交流史現地調査研究～地域・環境・心性～』1, pp.107-124, 2006, 査読有り

⑮高津孝(翻訳)「地域史の出現：南宋・元代の婺州における歴史, 地理学, 文化」(ピータ・ボル著)『東アジア海域交流史現地調査研究～地域・環境・心性～』1, pp.125-155, 2006, 査読有り

⑯岡元司「宋代における沿海周縁県の文化的成長-温州平陽県を事例として-」, 『歴史評論』663, pp.2-11, 2005, 査読有り

〔学会発表〕(計8件)

- ①早坂俊廣「全祖望と鈔書の精神史」, 日本中国学会第六十二回大会, 2010年10月10日, 広島大学文学部
- ①岡元司「疫病・環境と東アジア海域史一科研寧波プロジェクトの紹介を兼ねて一」, 第1回中国環境問題ワークショップ「環境との対話一東アジア海域世界と疾病一」, 2008年12月21日, 総合地球環境学 研究所
- ③岡元司「東アジア海域史をめぐる陸の環境」, 寧波プロジェクトシンポジウム「東アジア海域史研究の課題と新たな視角」, 2008年11月15日, 国民宿舎みやじま杜の宿
- ④岡元司「宋元時代浙東沿海地域における基層社会の変容と信仰一地域空間の視点から一」, 社会経済史学会第77回全国大会, 2008年9月27日, 広島大学
- ⑤岡元司「寧波の文化・環境をめぐる空間の中長期的変化寧波 GIS プロジェクトの現状と目標」, 寧波プロジェクト・ワークショップ「焦点としての寧波・浙江一文化の多層性とその環境一」, 2008年7月27日, 東京大学
- ⑥早坂俊廣「土地の記憶／全祖望の記録」, 同前
- ⑦二階堂善弘「寧波の海神・招宝七郎の日本への伝来」, 同前
- ⑧岡元司「疫病多発地帯としての南宋期両浙路一人口・環境・日中交流一」, 東方学会 会員総会シンポジウム, 2007年11月9日, 日本教育会館

〔図書〕(計9件)

- ①加藤徹『中国古典からの発想一漢文・京劇・中国人』, 中央公論新社, 301頁, 2010
- ②高津孝『博物学と書物の東アジア——薩摩、琉球と海域交流——』, 榕樹書林, 276頁, 2010
- ③高津孝(編訳)『中国学のパースペクティブ』, 勉誠出版, 435頁, 2010
- ④二階堂善弘『明清期における武神と神仙の発展』, 関西大学出版部, 207頁, 2009
- ⑤吾妻重二・二階堂善弘『東アジアの儀礼と宗教』, 雄松堂出版, 425頁, 2008
- ⑥荒木見悟監修・早坂俊廣他訳注『竹窓随筆一明末仏教の風景一』, 中国書店, 551頁, 2007
- ⑦加藤 徹『漢文の素養』, 光文社新書, 240頁, 2006
- ⑧平田茂樹, 遠藤隆俊, 岡元司編『宋代社会の空間とコミュニケーション』, 汲古書院, 410頁, 2006
- ⑨二階堂善弘:『道教・民間信仰における元師神の変容』, 関西大学出版部, 256頁, 2006

6. 研究組織

(1) 研究代表者

早坂 俊廣 (HAYASAKA TOSHIHIRO)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号: 10259963
(2009年12月2日から)

岡 元司 (OKA MOTOSHI)

広島大学・大学院・文学研究科・准教授
研究者番号: 10290777
(2009年12月1日まで)

(2) 研究分担者

加藤 徹 (KATO TORU)

明治大学・法学部・教授
研究者番号: 80253029

曾田 三郎 (SODA SABURO)

広島大学・大学院・文学研究科・教授
研究者番号: 40106779

高津 孝 (TAKATSU TAKASHI)

鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号: 70206770

二階堂 善弘 (NIKAIDO YOSHIHIRO)

関西大学・文学部・教授
研究者番号: 70292258